

夜天閃光の星天龍

アルテール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不幸にも死んでしまった男子高校生。

転生した体はバルファルク!?

命の軽いモンスターハンターの世界で彼はどう生きるのか？

これは1匹のバルファルクが己の幸せのため頑張った結果いつか『星天竜』と呼ばれる物語。

この作品は種族の違うモンスターの恋愛があります。

この作品は暇つぶしや勢いなどでできているため更新は常時不定期です。

感想、評価、お気に入り登録ぜひお願いします！

目次

- 第一話 不幸な少年は転生される | 1
- 第二話 初めての戦闘はかなり辛い | 6
- 第三話 幽体離脱は本当に起こる | 14
- 第四話 食べ物がなくなりそう、助けて！
！ルドえもーん！え？諦めろ!？ | 24
- 第五話 自由とは素晴らしい！ | 30

第一話不幸な少年は転生される

身体が灼熱のように熱い。

ほんと、どうしてこうなった。

モンスターハンターダブルクロス。

何ヶ月も金を集めて、ようやく買ったゲーム。

モンスターハンターシリーズのゲームをするのは久しぶりだったのだ。

……だというのにどうして、殺人犯とばったり出会ってしまったのか。

ええ見事ナイフで刺されましたよ。まあ刺されたあと蹴りを叩き込んで、逃げようとした殺人犯に刺さったナイフを抜き、投げてやった。見事に足に刺さったぜ。ざまあ。

そのあと力が急激に抜け、視界がボケていき死にましたつと。
ほんと不幸な人生だったな……

「で、思い出したかの？」

で、気がついたら一面真っ白な部屋。そして神様らしきお爺ちゃん。

ええ思い出しましたよくそつたれ、せめて死ぬならゲームしてから死にたかった。

「死ぬ寸前でやりたいことがそれかのう、お主筋金入りのNEETじゃの」

うるさいやい、友達が少ないからゲームしかすることがないんだよ。

「それで、お主は何のモンスターに転生したいんじゃ？モンスター側に転生したいとい
う奴は滅多におらんぞ」

えつとそれじゃあ、大型モンスターでおじさんが好きに決めてくれ。

「なんじゃと！お主何のモンスターでもいいというのか？」

いや、だって俺特に好きなモンスターないし、なんでもいいよ。

「そうか、じゃあ早速選ぶとしようかの、後悔するんじゃないぞ」

すると老人はどこからともなく白い箱を取り出した。

まさかのくじ引き形式である。

老人はゴソゴソと白い箱の中身を探り、折りたたまれた白い紙を取り出した。

「ふむ、これじゃ！ほれ、早速開いてみる」

老人から紙をもらい、開いてみる。

『バルフアルク』

書かれてあったのはそんな簡素な文字。

バルフアルク？ 確かゲームに書かれてたモンスターだっけ？

「ほう、そのモンスターになったか、それで『転生特典』はどうするんじや」

いくつまでいいんだ？

「そうじやのう……お主なら5つじやな」

ううん……ところで他のモンスターを食べたら、そのモンスターの能力を使うこと
てできるのか？

「確かに使うことができるかもしれないがなかなか起こらんで、DNAは環境と時代に
応じて変わっていくじやろうそれと同じじや」

そうか……じやあ食べたモンスターや植物、環境などのいいところを制限なしで適用
し力にする能力と無限に成長し、進化する能力、成長や進化速度の上昇、すべてのモン

スターの情報で。

「うむ？最後の一つはどうするんじや？」

あんたが決めてくれよ、俺あまりこのモンスターを知らないし、神様なら適した特典を決めてくれるだろ。

「ふむ、お主が初めてじゃな、わしにそんなことを言う奴は……よし！いいじやろ！お主に適した特典を与えてやろう」

それは嬉しいな。じゃ、頼んだよ。

「頼まれた。ではお主の次の人生が実りの生でありますように」

次の瞬間、視界が暗転した。

第二話 初めての戦闘はかなり辛い

暗く、狭く、息苦しい。

それしか表現できない空間にいた。

いや、これ卵だろ。だつて全身覆ってるし。

殻らしきものを壊すため、全身をぐぐーと持ち上げる。

うおおおおおおお!!燃えろ!萌えろじやなくて燃えろ!俺のなにかあ!

いや、本当に燃えたら困るが。

そうやってしばらく続けていると、パキパキツ、と割れてきた。

おお!光が差し込んできた!もう少しかな?

パキパキ、パリイン！

ちよ！猛烈な光で目が！目があああああああ！

暫く光に目が眩み、しばらく悶絶しているとようやく目が慣れ、周りが見えてきた。

視界には……孤島のエリア？あれ？バルファルクはこんなところ住処にしてなかったはずじゃ……

周りをぐるりと見渡すと、銀色の巨大ななかが見えた。いや、これは……バルファルクの死体？

なんでこんなところにいや、これは俺の親？なんでこんなに傷ついて……

『おーい、聞こえるかの』

え、神様!?!なんで？なんで神様の声が聞こえるの？

『お主の特典と今の現状を教えてやろうと思つてな』

おお！ぜひ頼む！

『儂が選んだ特典はバルファルクの龍気エネルギーの生成方法の変化じゃ』

生成方法の変化？

『うむ。バルファルクは胸部により龍気エネルギーを生成する。じゃがお主の場合は生成方法が違うんじや。お主の場合は呼吸を行うだけで龍気エネルギーを生成することができるのじや、まあ流石に何もせずには生み出すというわけではないがの』

おお！それじゃあほぼ無制限に飛べるじやないか！

『戯け！話を最後まで聞け！確かに呼吸で生成できるが代わりに体内のエネルギーを使うんじや、使いすぎると倒れてしまうぞ。気をつけるんじや』

なんでもウマイ話はないもんなのか。ケチめ。

『誰がケチじや！もういい、話を戻すぞ。次にお主の現状のことじや。お主の親は巢でイビルジョーに襲われてな、傷を負いながらもお主の父親が囨となり、母親がなんとかお主の卵を持つて逃げ出したんじや』

え？じゃあ目の前のバルファルクは俺の母親!?なんか複雑な気分なんですけど！

『しらんよ。それでは僕の説明は終わったので帰らしてもらおうぞい』

え!? ちよ! 待って! まだこちらにも質問が……

『さらばじゃ——シユン!』

あ、あの糞ジジイいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!

ま、まあいい、大丈夫だ。取りあえずあのバルファルクの死体を食べよう。

ムシヤムシヤムシヤムシヤ……

流石に全部は食えなかった。まあいいや、それじゃあ少し孤島を探検してみようか

く俺移動中く

ザバーン!

適当にウロウロしているとエリア10に来てしまった。

いえ、嘘です。ごめんなさい。エリア8にウロウロしていると滑って丘に落ちてしまったのだ。

咄嗟に翼脚で飛ばうとすると、ええ、バランス調整ができず、体が高速で右行ったり

左行ったり、壁にぶつかったりしながらなんとか着地に成功した。いや着弾というのかもしれない。水があつて助かった。

だが生きている！生きているって素晴らしい！

海面を眺めると自分の体が映った。

竜特有の鋭い青い瞳

すこし小さい白く光る牙

銀色に輝く、バルファルク特有の鱗

同じ銀色に輝く、翼脚

神様からもらつた知識で知っていたが自分になる、となると複雑な気分だ。

そうやって黄昏ていると嫌な予感がした。

慌てて、右へと全身を使って跳躍するとさつきまでいたところにルドロスが飛びかかつていた。

わー！ルドロスだー現実で見るとかなりおつきーな。ワニレベルじゃね？

なんて現実逃避をしている場合か！確実にコイツ俺を狙つてね？

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ぎやああああああああああああああああああ！

再び飛びかかって来るルドロスに跳ね飛ばされ、宙を舞う俺。

「ギャア！グルガア！（ガッ！何しやがる！）」

吹き飛ばされた痛みに叫ぶ俺、だがルドロスはまるで聞いていないかのようにこちらへと進んでくる。

どうする、逃げるか？いやこいつから逃げれるのか？無理だ。じゃあ戦うしかない。

確かに俺は心は人間だ、だが体はモンスターだ。まだ死ぬわけにはいかない。

戦え！恐怖なんてねじ伏せろ！

俺は、理性と本能を持つモンスターなんだから！

龍気エネルギー確認、行動可能、

ルドロスは再び突進の体勢になる。

俺はそれに合わせるように翼脚に力をいれ、鋭い先端部を槍を突くかのように力を溜める。

気は一瞬！相手より先に決める！

ルドロスが口を広げ突進してきた。

襲いかかる恐怖心が身体をすぐさま動かそうとするがそれに抗い限界までルドロスを引きつける。

残り数センチのところで右翼脚をルドロスに突き出す！

体をねじり、龍気エネルギーを推進力に勢いをつけた銀槍はルドロスの喉にあたり、抵抗なく貫いた。

仕留めたルドロスを頬張る。

生肉もいいが焼いて食ったほうがいいかもしれない。

焼けるのはしばらく先の話になりそうだな。

そう思いながら食べ終わった俺は自分の住処を見つけるため、エリア9へと向かっていった。

第三話 幽体離脱は本当に起こる

あ、皆さん、こんにちわ。

現在、俺はエリア5にいます。

いやあ住処を探そうとしていたら見事ルドロス三匹に出会ってしまったのだよ。

まあさっきの戦闘のように銀槍で戦ったら勝利できました。

あと攻撃の種類が増えた。

なんと龍気エネルギーを弾丸として発射できるようになった。以降これを龍気弾と名乗ろう。

まだソフトボール並しか打てないが威力は低くはなかった。

一撃でルドロス倒せるし、これもあのバルファルクを食べたおかげだろうか？

取りあえずお腹はいっぱいだったので倒したルドロスは水袋のみ食べた。

ふう、お腹いっぱい、それじゃエリア2行こうかな。

えっと確かこつちだったような気がするな……

く俺移動中く

やっべ、どうしよう、ロアルドロスがいたんだけど。

絶賛水浴び中でっせ。こちらにはまだ気づいていないな。まあ今のところでは勝つことは無理だろう。

いやだって大きすぎるよ、さすがロルドロスの親分。

こちらとまだ生後1日だぜ、倒せるわけねえじゃん。

と、いうわけで龍気を噴出させて、一直線でエリア3へレッツツゴウ！
ちよ！速すぎ！まだうまく調整できないこと忘れてた！

何故だろう嫌な予感がする。

現在エリア7で俺はそんなことを考えていた。

なんていうか威圧感的なものが感じるんだよね。まあいい行ってみよう。

俺はエリア8にきたことを後悔した。

まずい！まずい！まずいまずいまずいまずいまずいまずいまずい！！

イビルジョーが吠え追いかけてきた。

だが見ない、見る暇もない！

飛行の失敗をしたら死ぬのだ、ミスしたら殺される。

すぐさまエリア7に行き、エリア3へと逃げる。

龍気エネルギーを全力で使い最高速度逃げているのに……

距離が離せない！

速すぎる！むしろ縮まって来て……

「ゴガアアアアアアアア!!」

イビルジョーが尻尾でぶつけてきた。

こなくそー！翼脚の向きを少し上向きにして下にしゃがみ低空飛行へと移行する。
エリア3に移動した。よしこれで……

しまった！急激には曲がれな……

俺は一つ過ちを犯した、そうエリア4に移動するには曲がらなければならないのに操作に失敗してしまった。

身体が地面にぶつかり、それでもスピードが落ちず、二度三度跳びはねていく

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

くそ、早くエリア4へ……

ズン！ズン！

聞こえてくるのは恐怖の権化。
最凶の暴食の悪魔。

イビルジョーがエリア3まで追いかけてきた。イビルジョーの背後にはエリア4が

どうする！、どうする！

このまま戦うと絶対殺される。背後のエリア1に向かうのもダメだ。いつか追いつかれる。

だったら、エリア4へとイビルジョーを抜き全力で逃げる。あそこにはイビルジョーは入れない！

これをミスったら死ぬ覚悟はいいな俺！

イビルジョーが立ち止まり俺を見据える。

目でわかる、確実に食い殺すと。

イビルジョーとのにらみ合いが続く。そして……

先に動いたのは俺、龍気エネルギーを使い、一直線に突き進む。

対してイビルジョーは身体を上に戻らせ、何かを溜めるような仕草をする。

ブレスか！考えろ！どうやって避ける、左右……ダメだブレスに薙ぎ払われるだけ、

じゃあ下……これもダメだ、打ち出したとき体勢をイビルジョーは低くするため避けられない。だったら……上だ！

イビルジョーが反らした身体を戻す瞬間！

俺は身体を空中で一回転し、イビルジョーの口より上空に逃れた。

そしてそのまま翼脚を爪に変形させ、龍気弾を乱射する。

目標は顔！、目隠しとして……

龍気弾は見事顔に命中する、今のうちに……

俺は、残りの龍気エネルギーを全力で放出させ、エリア4逃げ込んだ。

あー疲れたー。

緊張が解けて急に眠気が……まあいいや睡眠大事だし。

(^ o ^) ノへ おやすみー

〈 Now Loading 〉

かまぼこ！

あ、おはよう、朝ですわー。

みなさんは学校へ行きましよう。俺には関係ないがな。

ふははは！残念私はモンスターだから関係がないのだ！

……虚しいなこれ。

まあいいやお腹すいた。食べ物探そう。

あ、そうそう攻撃方法が増えた。さすが転生特典。体内で水を作り放出することができるようになったのだ。

出せれる場所は口と翼脚、うんびびった、あれだ、水球を同時に3つ出すことができないのだ。

体は一回り大きくなり、少しは強くなったのではないだろうか？これも特典のおかげか。

ん？ちよつと待て、つまりキノコとか食べたならその力を得ることができんじゃないか？

よつしや、じゃあご飯はきのこ肉にしよう。あとはイビルジョーに気をつけながら……

集めた、集めたぞ。薬草とかキノコとかあ、ついでにジャギイを狩った。

ちなみにジャギイはどちらかというところドロスよりは美味しかった。ああ肉を焼きたい。

さてとキノコを食べようつと……

バクツ

あれ？結構いけ……

シビビビビビビビビビビ

やっぱ、なめてたわ。死ぬかと思った。でもこれで麻痺毒を使えるようになったはずだ。

次毒テングダケと解毒草と一緒に食べる。これで大丈夫だろう。

ああもうめんどくさい！全部食べちゃえ。

ムシャムシャムシャ

あれ？急に意識が……

し、死ぬかと思った！

やべえ、流石に一気に食べるのはまずかった。

まさかの幽体離脱を体験するとは思わなかった。

うう、まだ舌がピリピリする。

口直しにルドロス狩ってこよう。

もつというんな物を食べれば強くなれるだろうか？

第四話 食べ物がなくなりそう、助けて！ルドえもん ！え？諦めろ!?

あ、ドーもこんにちは、俺です。

前回の幽体離脱で新しい戦闘方法が増えました。

体から麻痺毒が生成され、尻尾から出せるようになった。だがまだ少し痺れる程度、続けていれば強くなるだろうか？

毒はまだ出せなかったフロギイとか食べないとダメだろうか？

眠り毒などもダメだった。これも地道に続けて食べていくしかないだろう。

まあそんなことは別にいいのだ、それよりもいいことがあった。

空が自由に飛べるようになりました。

イビルジョーがいない間にエリア5で練習した甲斐があった。

方向転換等や宙返り、サマーソルトもできるようになった。

これがかかなり難しい、龍気エネルギーを放出する方向を間違えればすぐさまバランスを失ってしまうのだ。

これを一週間続けていると、飛行が少しだけできるようになった。やった!万歳!
まあそんなわけで現在、エリア5でイビルジョーとロアルドrossの戦いを観戦して
いた。

「シャアアアアアアアアアアアアア!!」

「グルゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

いやあイビルジョーすごいね、ロアルドrossのプレスも突撃も全く効いてない、尻尾
攻撃は逆に噛み付いて離さないようにしている。

やはり戦わなくてよかった〜マジで。

あ、ロアルドrossの尻尾をイビルジョーが食いちぎった。

ロアルドrossが痛みに苦しみ悶え、距離を離そうとするがイビルジョーは離さないよ
うに詰め寄る。

そのままロアルドrossは首を噛み付かれ息だえた。

イビルジョーがロアルドrossを食べて、他のエリアに行くのを確認してから隠れてい
た草むらから出る。

おそろおそろ移動して食い散らかせたロアルドロスに近づく。

うわく食べたところが酸性の唾液がついて肉が溶けて劇臭がする。くせえ。

我慢我慢と唾液が付いていないところは美味しいな、これで狂走エキスとかできないかな？

まあいいや、えくと目的のものは……あつた！水袋！傷ついてもないし唾液もついていないな。

それじゃいただきます！。

ムシャムシャ

よし、じゃ他のモンスター来る前に逃げましょうかね。

くNowloadingく

最近モンスターが少なくなってきた。あのイビルジョーめ何でもかんでも食いやがって。

ルドロスも一匹いるかどうか、ジャギイやジャギイノスも同じ位、イビルジョーめ、少しは生態系を考えろ。

俺も食料が無くなり餓死するのは嫌なのでイビルジョーの食べ残しを食べている。もうハイエナと名乗ってもいいかもしれない。

さて、現在、鉱石を集めている。

これはひとつの実験、特典のおかげで食べた物の力を得ると言うならば鉱石も食べれるのではないかということ。

方法は簡単だ、翼脚を爪に変え、鉱石が取れるところに攻撃する。

最初は爪が欠け、激痛が襲ったが、これを続けていくと、徐々に欠けることが無くなってきた。

今では、削るところか、斬ることもできるようになった。

まあそんなわけで、最近の食事が鉱石と薬草、キノコやハチミツになっている。

鉱石を食べると、最初は石の味しかしないが徐々にポテトチップスのような味になっていく、しかも石の色によって味が変わっていく、ちなみに好みは青色の石と円盤状の石だ。

鉱石は確かに美味しいのだが、栄養が足りない、大量に食べても、肉を食べたほうが栄養が豊富なのだ、比率で言ったら、1対5という感じ。しかも鉱石だけを食あたりを起こすし。

はあ早く成体になるかイビルジョーがどこかに行つて欲しい。

まだ俺はルドロスとほぼ同じ大きさなのだ。

はあ、薬草食べよう。

あの悪魔が！生き物ほぼ全部食いやがった！

どうすんだよおい、あなたはどうしますか？ルドロスさん！

え？海に逃げる？マジですか！俺のことを忘れないでくださいよ！お達者で

とまあこんな感じでルドロス達は海に逃げましたとき、めでたし、めでたし。

めでたいわけあるか！あのイビルジョーめ、ここにはもう食べ物はないからさつさと

どっかいけよ。

なんで俺を追ってくるんですかねえ!?

最近、食べ物を探しに出かけ、イビルジョーに見つかり逃げる日々を過ごしている。

そのせいで飛行技術が上達した。

なんか、複雑な気分だ。

てか、なんでハンターが来ないんだよ！倒せよ！お前らみたいな人外はイビルジョー

と戦つてろ!

はあ、魚でも捕りに行くか。

と、思つてた時期がありました。

エリア10でイビルジョーがガノトトスを食つてました。

すぐさま、龍気エネルギー放出、エリア8へと飛んでいく。

ふはは!もう貴様に脅かされることはないわ!

すみません調子乗りました。心臓バックバクです。エリア8からイビルジョーがいなくなるのを確認してから、ガノトトスの肉と水袋を食べる。ガノトトスさんごめんなさい。

早く、成体になりたい。

俺は、1秒でも早く成体になることを決意した。

第五話 自由とは素晴らしい！

微かな光が洞窟を照らすエリア4で鉱石をガジガジ噛んでいるモンスター、どうもバルフアルクこと俺です。

転生から約一ヶ月、身体も大きくなり、成体より少し小さい程まで大きくなった。さて、現在の能力を見直そう。

現在俺が扱える属性が龍、水、毒、麻痺毒だ。

まず、毒と麻痺毒、毒は毒テングダケを食べ続けると、生成されるようになった。麻痺は威力アップ！ルドロスぐらいなら一撃でしばらく動けなくさせる。

二つとも尻尾から出せるようになり、麻痺と毒を同時に付けるため、逃げる時間稼ぎに大変便利だ。

次、水、これは驚いたことがあった。ロアルドロスの水袋を食べたから水球の威力が上がっているのはいい、問題はその後、ガノトトスの水袋が原因だったのだ。

口から、高圧水流プレスが出せるようになりました。

流石に翼脚からは出せないが、翼脚からも水球は出せるため、威力は申し分ない。

そして龍属性である龍気エネルギー、これが一番驚いた。龍気エネルギーが放出だけでなく展開ができるようになった。え？意味がわからない？例えば翼脚を前方に向ける龍気形態で、龍気を展開すれば、紅色の壁を前方に出現させ、防御することができる。試してみると、イビルジョーのプレスを防ぐことができた。数秒で砕けたが。

ついでに言えば翼脚の形状変化でリオレウス等のような形状に変え、龍気を纏わせれば、羽ばたくことができた。おそらくだがこの龍気エネルギーを物質化させているのではないだろうか？と考えている、物質化させた龍気エネルギーは重さを持たず、固く、自由に変化させることができるのではないかと、まあ予想だが。

どうしてこうなったか、まあ十中八九、特典と最初に食べた母親だろうか。
身体能力は、ロアルドrossの狂走エキスが体内で生成可能になった。

身体にまるで血管のようなものが広がっており、おそらくそれから生成されているのだろう。

まあ広がっているような気がするというだけで本当はわからないが、水面で見ても身体に変化なかったし。

後は鉱石の食べすぎで鱗が硬くなった、切れ味ミドリまでなら大丈夫だろう、大丈夫だと信じたいたい……。

よし、朝ごはん終わり！さて、外に出ましようかね、え？どうやって出るかって？決まってる突進じゃボケー!!

〈Now loading〉

「グルゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!!

どうして!こうゆう時に!イビルジョーに!出会った!よ!

「グルガアアア!!!」

甘いわ!

イビルジョーの突撃を、翼脚から龍気を放出し、急上昇し、飛び避ける。

ハハア!何度お前に追いかけられたと思っっているんだ!お前の行動は知り尽くしているんだよ!

じゃあな、クソ野郎!いつかお前を倒してやるよ。

イビルジョーは今の俺では勝てない。だから力をつけて戻ってくる。それまで待つていやがれ!

そのまま、孤島から離れるように、空高く舞い上がる。

風が自分の鱗を撫で、心地よい。

最高の気分だー

成体になるまで我慢したかいがあつたー。

トンボ返りに錐揉み移動、今までしたことのない体験ができた。

自由って素晴らしいー

さーてどこに行こうかなー。

溪流とか古代林とかだったらいいなー

でも、場所をあまり知らないしなー

あ、遺跡平原はつけーん、あそこに降りよう。

えーとここはエリア9かな、じゃあしばらくここを住処にしようつと。

いいですね? ジャギイ達よ、俺は今から寝る、邪魔したら殺す、いいね?

近くにいるジャギイ達に、威圧すると、ジャギイ達はコクリつと頷いた。

ならいいや、(つ▽ー) オヤスミー。

〔Now loading〕

おはようー彼女がほしいバルファルクだよー。

取りあえず朝ごはんを食べに行こうつと。

〔俺移動中〕

おお！アプトノスがいる！久しぶりの肉だ！

エリア3に行くとき草食動物がおり、お腹を満たすことができそうだ。

龍気を瞬間放出させ、アプトノスとの距離を詰め、銀槍で貫こうとする。

限界まで引き伸ばし、龍気エネルギーを燃料に貫く！

一直線に伸びた槍はアプトノスの体を貫き、大穴を空け、その後ろにいるもう一匹のアプトノスの首を貫いた。

……………はあ？

いや、いや、射程距離長過ぎじゃね?しかもそのあと衝撃波で地面軽くえぐれてるし。まあいいや、一匹で十分だしあと一匹はジャギイとかに上げて……

バサツバサツバサツ

不意にそんな音が耳に聞こえた。
その方向を見るとそこには……

ティガレックスが降りてきた。

すぐさま戦闘に備える、ティガレックスは突進攻撃やバインドボイスが得意なんだ。
視界に捉えていないと、いつ攻撃されるかわからない。

ティガレックスはこちらを見て……

来るか!つと身構えると。

「すまんのう、お主が仕留めたアプトノスを恵んでくれぬか?」

50代の男性の声が聞こえた。

.....

「おーい聞こえとるか？それともお主、言葉を話せないのか？」

取りあえずなんで喋れるかという質問はおいておこう。

「ああ、聞こえているよ。それで？何の用だ？」

「ほう、やはり話せたか、それにしても若いのう、お主」

「別にいいだろ、それで？俺にどうして欲しいんだ？」

「うむ、そのアプトノスを恵んでくれないかのう」

「まあ別にいいけど……」

仕留めたアプトノスを一匹ティガレックスへと投げる。

「おお!かたじけない!」

俺とティガレックスは、そのまま、アプトノスをムシャムシャと骨ごと食べた。

くしばらくお待ちくださいく

「それで、あんたはなんで俺に声をかけたんだ?あんたなら一人で食べ物ぐらい取れる
だろ?」

「誰があんたじゃ!、儂にはムクロという名前があるじゃが」

「それで?ムロ爺は何の用なんだよ?」

「そうじゃな、本来ここには住まないバルファルクが現れたため、興味を持ったんじや
よ。ところでお主、名前はなんと言う?」

「無い、生まれた時から親が死んでいたからな」

「ほう、それは済まなかったのう、そうじゃな、食べ物くれた代わりにお主に名前とこ
の地域の情報を教えてやろう」

いきなり何を言っただろうか?このジジイは……

「別にいいんだが……」

「ほほ、遠慮するでない。そうじゃのう……」

どうやら逃げ道は無いようだ。前世の名前ならあるんだけど、この世界ではそれを名乗らない。前世と今は違うからだ。俺はバルファルクとして生きているし。

「そうじゃなあ……お主はこれから『シン』と名乗るがよい」

「あー……はいはい、わかったよ。ムロ爺、それで？この地域の情報は？」

「そうじゃな、ここら辺にはリオレウスやドスジャギイ等がいるぞい」

「そいつらもムロ爺みたいに話すことができるのか？」

「いや、そもそも農らのように言葉を喋るためには幾つかの方法がある」

ムロ爺が言うには、言葉をしゃべれるやつは色々限られているらしい。

一つ目生まれながら喋れる奴。

二つ目古龍。

三つ目古龍に仕えた者。

等らしい。言葉を話せる奴らはハンター達からG級と言われ、人間の言語を理解する

奴らはそれよりも少ないらしい。

そしてモンスターで知能がある奴らは古龍を除くと、古龍に数年仕えたものは知性を得るらしい。

一つ目の奴らは親が言葉を理解されず巢から追い出された奴が別種族に拾われ育てられると、食性の変化により体色や行動が変化しそれを亜種というらしい。

三つ目は話せないときに古龍に出会い本能的に古龍に仕えたものらしい、数年仕えたものは話せるよになるらしい。

ムロ爺も三つ目に該当するらしい。

「ふーん、なるほどな、ありがとな、ムロ爺」

「若い者の頼みじゃ聞いてやらないと年長組の格が下がるからの」

「それじゃ、俺は、自分の巢に戻るから、また会おうぜムロ爺」

「そうじゃな、また会おうぞ、シン」

こうして俺は、自分の巢へと、龍気を放出し、戻っていった。